

教員養成課程における教科専門科目「声楽」のあり方についての一考察

金原 聡子¹・松永 洋介²

1 問題の所在と研究の目的

岐阜大学教育学部音楽教育講座に入学を希望する受験生には、ソルフェージュ、声楽、器楽の実技試験を課している。

この中で器楽には2通りの試験方法があり、受験者はいずれかを選択する。一つはピアノのみを演奏する方法である。もう一つは任意の管弦打楽器とピアノ演奏と両方を選択する方法である。

本講座に入学した学生の傾向を調べると、前者を選択した学生は幼少時よりピアノを習っていた者が多い。これに対して後者を選択した学生は中学校や高等学校で吹奏楽を行っていた者が多く、ピアノは高等学校から学習を始めた者も少なくはない。つまり、ピアノの技量は高度ではないが、その分管弦打楽器でカバーできる自信を持っている者といえる。いずれにせよピアノまたは管弦打楽器のいずれかの楽器については3年以上の演奏経験をもつ者がほとんどである。

これに対して声楽の学習経験をもっている学生は、受験前の1年ないし半年の期間で専門的に学習した者が多い。これは受験科目として声楽が指定されているために専門的に声楽のトレーニングを受けに通ったものと考えられる。中学校や高等学校でコーラス部に所属していた学生もいるが、合唱におけるボイストレーニングを受けていても、歌曲による専門的なレッスンはほとんど受けていないのが実情である。

教員養成大学では声楽家を養成することを目的とはしていない。しかし、小学校や中学校の

音楽の授業において歌唱の授業を行うことは必須である。そのためには学生が声楽についての知識や技能を獲得することが求められるだけでなく、それらを教育と結びつけることが必要である。現在の教員養成大学では、教員養成を意識した声楽の授業を行っている大学はごく少数である³。教員養成大学における声楽の授業は、芸術大学や音楽大学のそれと同じであってはならない。教員養成課程における声楽の授業のあり方は再構築される必要がある。

本論では、その手がかりとして、教育学部教員養成課程における声楽についての学生の意識を探るとともに、実践事例を考察することによって、授業構築のための課題を抽出することを目的とする。

2 研究の方法

まず、声楽の授業を受講した音楽教育講座所属の学生にアンケート調査を行う。次いで、授業実践の中から抽出学生のレッスンを取り上げ、課題を明らかにする。

3 本学音楽教育講座における「声楽」の位置づけ

(1) 教育職員免許法との関連から

岐阜大学教育学部では、卒業要件として小学校教諭1種免許状と中学校教諭1種免許状の取得が求められている。音楽教育講座に所属する学生の場合は中学校(音楽)の1種免許状の取得が必要となる。したがって、授業科目は教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則に基づいて設定される。

中学校教諭1種免許状(音楽)を取得する場合、教育職員免許法第1章第4条では、次の5つの科目からそれぞれ1単位以上計20単位を修得する必要があると示している。すなわち「ソ

1 岐阜大学教育学部非常勤講師

2 岐阜大学教育学部音楽教育講座

3 例えば大阪教育大学の教員養成課程では「演奏表現(こえ)」という科目を設定している。また、鳴門教育大学では教科内容学に基づいて、教科専門科目と教職専門科目との接点を探った授業科目を設定している。

ルフェージュ」,「声楽(合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む。)',「器楽(合奏及び伴奏並びに和楽器を含む。)',「指揮法」,「音楽理論,作曲法(編曲法を含む。)'及び音楽史(日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む。)'の5科目である。

音楽の技能は,知識のようにすぐに身につくものではなく,習熟には時間を必要とするため,同じ分野の科目を複数学期や複数年次にわたって開設している大学が多い。例えばピアノの場合,「ピアノⅠ」,「ピアノⅡ」,「ピアノⅢ」,「ピアノⅣ」となりそれぞれ1年前期,1年後期,2年前期,2年後期に受講するようになっている。

(2) 本学音楽教育講座における「声楽」の位置づけ

本講座では平成24年度よりカリキュラムを一部変更し,「声楽Ⅰ～Ⅳ」までであったのを「声楽Ⅰ～Ⅵ」までとした。学生が声楽の授業を初めて履修するのは2年生前期であり,これが「声楽Ⅰ」である。後期には「声楽Ⅱ」が開講される。そして「声楽Ⅰ」と「声楽Ⅱ」は必修科目である。3年次以降,4年生後期までは「声楽Ⅲ」から「声楽Ⅵ」までが開講される。これらは選択科目である。

以上述べた体系に変更する前は3年生後期の「声楽Ⅳ」までの開講であった。その後は卒業研究として声楽を選択した学生が卒論指導として受講していた。

しかし,卒業条件変更によって,本講座では従来の主論文を卒業演奏,関連する内容を副論文とする内容を改め,全員に音楽教育に関するテーマに基づいて論文を書くこととした。つまり,卒業条件は,履修科目を満たしていることと,卒業論文の提出及び審査合格である。このため,4年生になると実技の授業がないという状態が生じた。その状況を改善するために,ピアノ,管弦楽器,声楽の授業を設けた。このことは,従来4年生では自分の選択した分野しか実技科目を履修できなかったのが,例えばピアノと声楽というように2科目以上を同時に履修できるようになり,学生にとっての勉強の機会が増えることとなった。

4 アンケート結果と考察

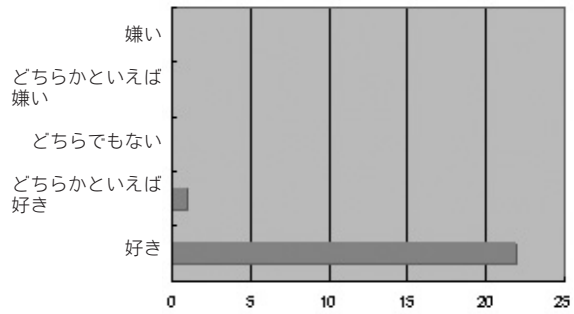
本項では,声楽を履修した2年生,3年生,4年生までの23人にアンケートを実施し,その意識を探った。

その項目は巻末資料1の通りである。

(1) アンケート結果

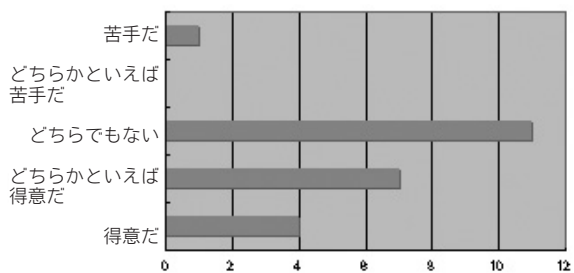
以下,項目ごとに結果と考察を示す。

① 歌が好きですか。



この設問は,歌(song)そのものに対しての意識を問うている。この問に対して「好き」と答えた学生は22名,「どちらかといえば好き」と答えた学生は1名であった。すなわち全員が肯定的に回答したと考えてよい。音楽を専攻する学生として,将来学校現場に立ったときに指導するために必要な歌をほとんどの生徒が好きと答えているのは当然と言えば当然であるといえ,否定的な回答がなかったことが学生の資質とも関連すると考えられる。

② 歌う事が得意ですか(ポップス等を含めて)



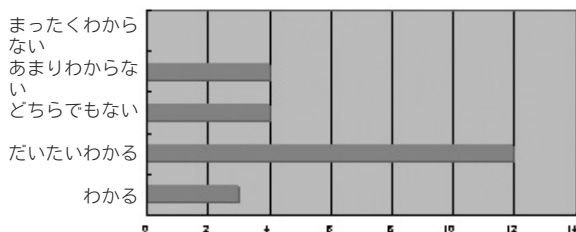
①の設問に対して②では,自分自身の技能と関わる設問である。

「得意だ」と「どちらかといえば得意だ」を合わせると11名で全体の半数である。一方,「どちらでもない」が11名で,「苦手だ」は1名であった。

このことから①で歌が好きだと回答したものの、自分自身の技能に関しては自信をもてていない学生が半数を占めていることが明らかになった。

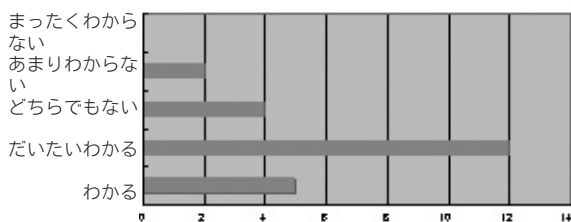
次の③、④、⑤の設問は技能に関わるものである。まず、結果のみをまとめて示す。

③発声の仕方がわかりますか。



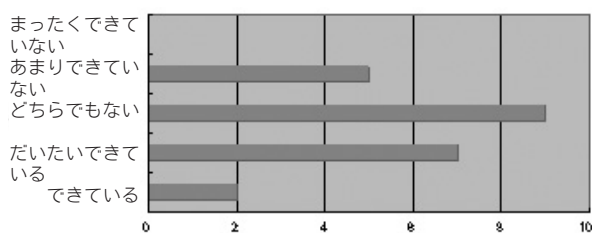
発声の仕方については「わかる」と「だいたいわかる」と回答した学生が15名であった。これに対して「どちらでもない」と「あまりわからない」がそれぞれ4名であった。

④腹式呼吸がわかりますか。



腹式呼吸については、「わかる」と回答した学生が5名、「だいたいわかる」と回答した学生が12名であった。これに対して「どちらでもない」が4名、「あまりわからない」は2名であった。

⑤腹式呼吸を習得できていますか。



腹式呼吸の習得については、「できている」

と回答した学生が2名、「だいたいできています」と回答した学生が7名であった。これに対して「どちらでもない」が9名、「あまりわからない」は5名であった。

③と④が示すように、発声の方法や腹式呼吸の仕方については「わかる」と「だいたいわかる」とを合わせた肯定的な回答が多かった。これは「もっと少ないのではないか」という指導者の予想を上回るものであった。このことは、指導する側が考えている以上に学生は理解していると考えてよい。

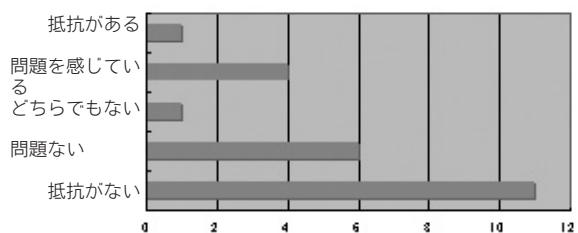
しかし、⑤が示すように、腹式呼吸を習得できているかについて問うと「どちらでもない」と回答する学生が最も多くなった。

「わかりますか」と「習得できていますか」との違いは、前者が腹式呼吸についての知識をもち、実際に体験して感覚をもっているのに対して、後者は歌う時に恒常的に腹式呼吸ができる状態にあることである。

したがって理解できていてもそれを習得できているとなると肯定的な回答を示す人数が減ることは、今後の授業を改善するための検討課題である。

体験的には、頭で理解しても体に覚え込ませるには繰り返し訓練が必要であるといえる。これはスポーツ選手が繰り返し練習するのと同じであり、声楽の場合は体を楽器として歌う。楽器を作り上げるのは時間がかかる。しかし、歌は人間に与えられた一番最初の音楽であるというように、誰にでも備わった才能なので、努力次第でのばすことができると考える。

⑥イタリア語やドイツ語の歌を歌う事に抵抗がありますか。

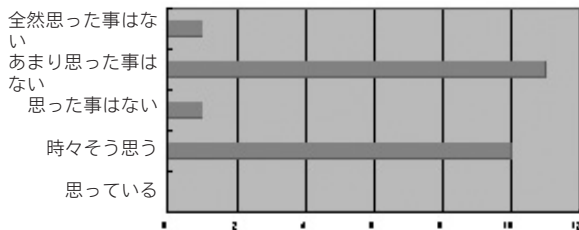


声楽の授業で扱う歌曲はイタリアとドイツの歌曲が中心である。そこで、これらの言語につ

いての抵抗感を問うことにした。

その結果、「抵抗はない」が11名、「問題ない」が6名とこの2項目を合わせて17名であった。一方「問題を感じている」が4名、「抵抗がある」は1名であった。半数以上の学生は抵抗がなかったり、問題を感じたりしていないが、その反面、抵抗感をもっている学生は約22%と全体の約5分の1であった。

⑦自分には音程を取る感覚がないのでは?と思っ
た事がありますか。



この設問では、「あまり思ったことはない」が11名、「時々そう思う」が10名とほぼ同数に分かれた。

レッスンを通しての学生の様子を観察していると、「時々そう思う」と回答した学生は、「自分は音が外れているかもしれない」と不安に思っていることが見受けられる。実際に授業中によく不安を口にしていることが見受けられた。

しかし、正常な聴覚があれば、いわゆる音痴という状態はない。このことは近年の研究でも明らかにされつつある。したがって、重要なのは、自分の出している声と、音が合っているかを判別できるかどうかという点である。自分の声は、外に出ている声と、内耳を通ってくる声は聞こえ方が違うので、音のずれが生じてしまうのだと考える。

また、発声の技術が身に付いていないと、自分の出したい音程が出せないことがある。また発声の仕方によって、音程がずれてしまうこともある。しかしいずれの場合も訓練によってこの状態は解消され、声楽の技術が向上すると考える。

(2) 考察

このアンケートを通して、学生は声楽につい

ての知識をもっていると考えているが、実際に技能として用いるには自信をもっていないということが明らかになった。

例えば質問項目①「歌が好きですか」、③「発声の仕方が分かりますか」、④「腹式呼吸が分かりますか」では、肯定的な回答がそれぞれ100%、65%、74%を占めた。なお、ここでは肯定的な回答とは例えば「わかる」「だいたいわかる」のように、5つの選択項目のうちプラスにとらえる上位2項目の和とする。

一方、質問項目②「歌うことが好きですか」や⑤「腹式呼吸を習得できていますか」では、肯定的な回答はそれぞれ48%、39%であり、半数以下となった。

このことは知識としては分かっているが、それが声楽の技能に結びついていないことを示している。

また、質問項目⑥「イタリア語やドイツ語の歌を歌うことに抵抗がありますか」については74%が肯定的な回答であった。このことは特に語学的な問題は学生にとっては障害になっていないことを示している。

しかし、否定的な回答をした学生も少数存在することから、外国語を用いた歌曲のどの部分に問題を感じるのかについてさらに調査をする必要がある。

さらに、質問項目⑦「自分には音程を取る感覚がないのでは?と思っただけですか?」の結果が約半数ずつに分かれたことについては、今後実際にソルフェージュを行って意識と実態との関係について調査をする必要がある。

5 声楽レッスン事例

ここではM子とK子の2名について、1年間声楽の授業でレッスンした経過と結果を報告する。

(1) M子(4年生女子ソプラノ)の場合

M子はもともと高い声で明るい声質をもっていった。しかし、長年の癖によるものと思われるが、顎と舌の奥に力が入ってしまっていて、体と声がつながらず、固いいわゆる喉声になってしまう傾向があった。

1年を通じて、喉の力を抜きお腹からの息に

乗せて響きで歌うように指導した。感覚の良い生徒なので、教師の指示によってすぐに改善できる所もあったが、癖というのは治すのが難しく、本人も頭では理解し、また自覚はしていても出来るようにならないので、苦戦しているようであった。

①教材曲：「清教徒」より「あなたの優しい声が」（ベッリーニ作曲）

この曲は前半のゆったりとしたAriaと後半のCavatinaの典型的なベルカントの形の曲で、美しい旋律を歌える声とコロラトゥーラのテクニックが必要とされる。

前半部分は彼女にとっては少し音域が低いせいもあり、声のなりにくい部分があったが、声を無理に鳴らそうとせず、息にのせてしゃべるように指導した。

後半部分は狂乱の表現として音階の乗降、半音階の下降が連続する。

M子は初めは1音1音正確に出そうとしていた。彼女自身ゆっくり練習したり、伴奏の和音を記憶したり、工夫して練習したようであるが、自然な音楽の流れにはならなかった。一般的に、歌うのが難しい部分は技術的な事項に問題を感じる傾向にある、しかしそういう部分こそ、気持ちに自然な息に乗せて流すように指導した。

最終的には正確な音が聞きたい訳ではなく、狂乱している主人公の気持ちが伝わるように表現された音楽が聞きたい部分である。M子はその様に意識したため、自然に楽に歌えるように変化した。また結果的に音程もその方がしっかりと刻めるようになった。

②教材曲：「ホフマン物語」より「オリンピアの歌」（オッフェンバック作曲）

この曲はかなり高度な曲でM子にはまだ早いと思われた。なぜならば、歌唱技能だけでなく、演劇的要素も必要とされる曲であるため、表現が難しいからである。しかし、彼女は以前から懂っていた曲ということで、本人の強い希望もあり、チャレンジさせてみた。

本人は努力し、かなり頑張って歌っていたが、結果的には無理がある事が自覚でき、もう少し声が成長してからまた歌うということで納得した。

③教材曲：オペラ「後宮からの逃走」より「ああ、私は愛しました」（モーツァルト作曲）

M子は当初ドイツ語の子音がうまく歌えず困難を感じていた。しかし、子音をうまく使って体からの息とつなげるように指導すると、声も音楽も表現も流れていくようになった。

この曲は高音の連続する曲であるため、高音の指導に使うことができた。具体的には、高音を出す時に、「軟口蓋を上げて、頭蓋骨の上半分を上上げる感じ」と指導した結果、喉で鳴っていた声がマスクラに響く声に変化した。さらに、高音部にきたら体を開くように指導した結果、「今までと全く違う感覚で高音が出た」と述べていた。

この体験により、本人も感覚が変わったためか、この後、「他の曲を歌う時にも以前より体と声につながる感覚がもてるようになった」と述べている。

④オペラ「清教徒」より「私はかわいらしい乙女」（ベッリーニ作曲）

この曲は卒業演奏会に向けて5ヶ月取り組んだ曲である。そのため、かなり細かく指導することができた。

M子は中間域が鳴りにくい傾向があった。そのため、響きを統一するように、中・低音は音の当たる場所を前歯から鼻の辺り、高音に行くにつれてマスクラから頭蓋骨の方に移動させていくように指導した。また、息の流れはいつも止まらずフレーズの最初から最後まで流れ続けているように繰り返し指導した。その結果、演奏会の頃には、音域によるムラも減り、高音も比較的よい音が出るようになった。

この曲はテンポが早く、コロラトゥーラの技術も求められる曲であるが、細かい音を正確に出すことよりも、シンコペーションのアクセントや、音楽の揺らし方、音の響かせ方に注意して、フレーズを大きく感じるように指導した結果、より生き生きとした表現になった。

⑤「レクイエム」より「Pie Jesu」（フォーレ作曲）

この曲では、曲が要求する、静かな中にも生命が流れ続けているような音楽を表現する為に、母音の音色を揃えて響きで歌うように指導した。

「i」「e」が食いしばっているような、喉と顎に力が入った声になりがちだったが、この曲を境に天井の高い母音の形で歌うことを意識するようになった。

曲自体は単純なメロディーなので、これまで指導してきた曲とはまた違った難しさがあるが、声に集中する事ができたのは譜面上はそんなに難しくないのであると考えられる。

⑥「Ave Maria」(カッチーニ作曲⁴)

この曲もフォーレの「Pie Jesu」と同じく、旋律が単純であるが故に難しいとされる曲である。しかし、旋律がとても美しく、また声域の点からも発声のためのよい訓練になる曲であるといえる。

この曲は「a」の母音で歌う部分が多いため、そこで声を押ししてしまう傾向にあった。そこで「o」の天井を保ったままで音を前の方に集めるように指導したところ、歌いやすくなったという効果を得ることができた。

また、この曲も長い期間レッスンを行ってきたが、声が鳴りにくくなった時期があった。今まで喉で押して声を鳴らしていたのを、喉の力を抜くようにしたので、その分お腹から息を送り続けないと、必要な支えがなく声が出にくくなってしまった。

良い発声になる為の過渡期としてはよくある事であるが、しっかり体を使い、喉の力を抜き響きで歌うように意識するように指導して、以前よりも無理のない発声が出来るようになってきたと考えられる。

(2) K子(3年生女子ソプラノ)の場合

K子は基本的な技術は身に付いている学生で、豊かな響きのある声をもっていた。しかし、喉を空けようとし過ぎて息が流れず、こもった声になってしまう傾向があった。そこで1年を通じて下あご、舌根の力を抜き、今までよりも高い場所で歌えるように軟口蓋を空けるように指

導したところ、楽に声が出るようになって来た。

①教材曲：「音楽に寄す」(シューベルト作曲)

受講するほとんどの学生がドイツ語の歌を歌った経験がなかった。しかし、ドイツは音楽文化の中心の一つであり、クラシック音楽を学ぶ者として知っておく必要があると思われる素晴らしい音楽がたくさんある。そこで、学生にとってハードルは高いが、ドイツリート⁵の初歩の曲を勉強させることにした。

ドイツ語の歌曲を歌うのは初めてであるため、ドイツ語の発音でかなり苦勞していたようである。しかし、発音指導を細かく行った成果が次第に現れはじめ、ドイツ語の音楽も少しずつ身近に感じるようになってきたように推測される。

②教材曲：「薔薇」(トスティ作曲)

ベッリーニやトスティには、初心者⁶が声楽を勉強するために取りかかりやすい曲が多くある。これらの曲は、旋律的にも音域的にも歌いやすい曲であるため、声楽の基本を中心にしっかりと指導するようにした。

K子は、母音によって響き方にムラがあり、喉の奥に飲み込むように歌う癖があったため、舌根の力を抜き、お腹で支えるように指導した。その結果、声⁷が楽に出るようになった。また、喉の奥で発音するのではなく出来るだけ前の方で発音するように指導したところ声⁸が体から離れるようになり楽に歌えるようになった。

③教材曲：「宵待草」(多正亮作曲)

学生が卒業して、小学校や中学校の教師になったときに一番多く指導する機会があるのは、日本語の歌である。そのときの指導の助けになるように、日本語の歌の歌い方や言葉の効率的な発音の仕方などを指導した。

学生の歌い方を見ると、イタリア語やドイツ語で歌っている時よりも感情を込めやすいように見受けられた。これは日本語であることが理由であると考えられる。しかし、日本語を歌うときに陥りやすい点として、どうしても日常会話をしているときのように響きがなく、喉だけで歌ってしまうことが挙げられる。そこで、そのようなにならないように、イタリア歌曲などを歌ったときに指導したように、喉の負担を少な

4 この曲はカッチーニ (Giulio Caccini, 1545頃 - 1618) 作曲であるとされている。事実、CDではカッチーニ作曲としての表記が一般的である。その一方でウィキペディアには、ウラディーミル・ヴァヴィロフ(旧ソ連, Vladimir Vavilov 1925-73)が1970年頃作曲したという記述がある。真偽については明らかではないが、ここでは両論を併記し、指摘しておく。

くするために、軟口蓋を空けたまま、口の先ではっきりと発音するように指導した。学生にとっては、日本語の歌を歌う事はとても楽しかったように見受けられた。

④教材曲：「私の愛の日々」(ドナウディ作曲)

この曲は音程の跳躍が多く、技術的に難易度が高い曲である。そのためK子は、自分には少し難しいと感じたように見受けられた。

この曲では、低音から高音に跳躍するときの注意点として、低音を出すときに高音の準備をしながら出すように指導した。また、K子がこれまで学習してきた曲よりもテンポが大きく揺れる曲であるため、音楽的な部分の勉強も多くなると判断する。

⑤教材曲：「アドリアーナ・ルクブルー」より「私はおとなしい下僕」(チレア作曲)

この曲はK子の声の質や声域に合った曲であるため、声の訓練の為にとても有効であった。

声をしっかりと息に乗せるように指導したところ、どんどん響き、体から声が離れて歌えるようになった。K子自身もよくなった感覚が分かったらしく、彼女自身が自分の歌についての自信をもてるきっかけとなったといえる。

6 まとめ

本論で明らかになった課題は次の3つである。

(1) 個々の学生の実態に応じた選曲

声楽の授業で取り上げる楽曲は、主としてイタリア歌曲とドイツ歌曲及びオペラアリアである。

選曲にあたっては受講生一人ひとりの歌唱技能を考慮しながら行っている。

例えばM子の場合、彼女の高い軽やかな声を生かしながらも、受講前からもっていた喉を固くしてしまう癖を解消し、体とつながった発声を指導することを優先した選曲となった。一方K子の場合、彼女の豊かな声を生かせるようなしっとりとした旋律の曲で、さらに声をこもらせてしまわず、体から離せるような指導を行えるような選曲を行った。

一年間の指導を通して、最終的には各自の抱える問題点をかなり解消できたと判断できる。

声楽に限ったことではないが、一人ひとりの

もっている技能は様々であるため、一斉授業とは異なった指導体系が必要となってくる。これまでは教師が一人ひとりの学生の実態を把握し、自分の経験に基づき、それぞれの学生に適していると思われる楽曲を選んでいった。しかし、一人ひとりの課題に対応する楽曲を体系化したモデルを開発することは今後の声楽のカリキュラムを考えていく上で重要であると考えられる。また、その際には、学生の興味・関心に基づいた希望を取り入れることも検討したい。

(2) 日本歌曲の教材化

選曲にあたっては日本語の歌をどう取り入れるかということを考える必要がある。

クラシック音楽を勉強する者は、クラシック音楽の花開いた時代背景を理解し、それらの国の作曲家の作った音楽に触れる必要がある。その為には作曲家が作ったままの言語で歌う事は必要条件となる。このことは、外国語として英語を中心に学習してきた学生にとっては少し困難さが増大する。特にイタリア語は本学では第二外国語として開講していないため、全くの初心者状態から始めることになる。

学生のほとんどは日本で生まれ育っているもので、日本の文化を背景としている。したがって、日本人作曲家の作った歌曲を、勉強しなくてはならない。ほとんどの日本人の子どもにとって、最初に耳にするのは日本語の歌である。また、学校現場で指導される歌もほとんどは日本語である。近年は日本語のリズムを崩したり、英語を交えたりしたポピュラー曲も教材として取りあげられることもあるが、まずは正しい日本語の歌を取り上げる必要がある。

大学で指導する日本歌曲と、教育現場で用いる教材曲とは必ずしも一致するものではない。しかしイタリア歌曲にはイタリア歌曲の歌い方があり、ドイツ歌曲にはドイツ歌曲の歌い方があり、日本歌曲には日本歌曲の歌い方があり。学生は卒業後、児童・生徒の指導者になるのであるから、教員養成大学では、日本語の歌についての指導する必要がある。

(3) 「声楽Ⅰ」から「声楽Ⅵ」までの体系化

以上述べてきた課題を踏まえ、教科専門科目「声楽Ⅰ」から「声楽Ⅵ」までを体系化する必

要がある。その際、「声楽Ⅰ」と「声楽Ⅱ」は必修科目であり、「声楽Ⅲ」以降は選択しない学生がいることも想定しながら、声楽の基本をシラバスとして盛り込んでいく必要がある。

指導内容は多く存在するが、1科目15週という限られた時間の中でいかに効率的に指導するかということを考慮する必要がある。また、そ

の際には、学生が授業を受けるだけでなく、指導者としての意識をもった受講のあり方を指導内容として構想していかなくてはならない。この部分こそ、教員養成大学における声楽と、芸術大学や音楽大学における声楽との違いであると考ええる。

巻末資料

声楽Ⅱ・Ⅳ・Ⅵアンケート

()年

今学期の授業を振り返って、あてはまる項目に○をつけてください。

- 1 歌が好きですか（ポップス等を含めて）。
(好き・どちらかといえば好き・どちらでもない・どちらかといえば嫌い・嫌い)
- 2 歌うことが得意ですか（ポップス等を含めて）。
(得意だ・どちらかといえば得意だ・どちらでもない・どちらかといえば苦手だ・苦手だ)
- 3 発声の仕方がわかりますか。
(わかる・だいたいわかる・どちらでもない・あまりわからない・まったくわからない)
- 4 腹式呼吸がわかりますか。
(わかる・だいたいわかる・どちらでもない・あまりわからない・まったくわからない)
- 5 腹式呼吸を習得できていますか。
(できている・だいたいできている・どちらでもない・あまりできていない・まったくできていない)
- 6 イタリア語やドイツ語の歌を歌うことに抵抗がありますか。
(全く抵抗はない・少し抵抗があるが問題ない・どちらでもない・少し抵抗があり問題を感じている・かなり抵抗がある)
- 7 自分には音程を取る感覚がないのでは？と思ったことがありますか。
(いつも思っている・ときどきそう思う・思ったことはない・あまり思ったことはない・全然思ったことはない)
- 8 授業で歌うときにあなたが感じる問題点を書いてください（記述）。